

V I E W

No.117 January 2018

CONTENTS

インタビュー

「ロシアで展開される日本型の街づくり ー日建グループの取組みー」 2

勉強会

「水とグローバルリスクと持続可能性」

〔講師〕東京大学総長特別参与・生産技術研究所 教授 沖 大幹氏 6

旅する研究員

「祝祭のまちキャンディ」..... 7

ロシアで展開される日本型の街づくり

ー日建グループの取り組みー

モスクワを始めとするロシアの大都市においても、アジアの新興都市と同様、交通渋滞は深刻です。そうした中、地下鉄等の利用促進により交通渋滞の改善に寄与する TOD (Transit Oriented Development: 公共交通指向型開発) への関心が高まり、その取り組みが始まっています。TOD をはじめとする我が国の都市課題解決のノウハウを、ロシアの都市再生・環境改善に活かすべく進めている、日露政府間での街づくりに関する協力の一端をご紹介します。

TOD 政策のロシアへの提案

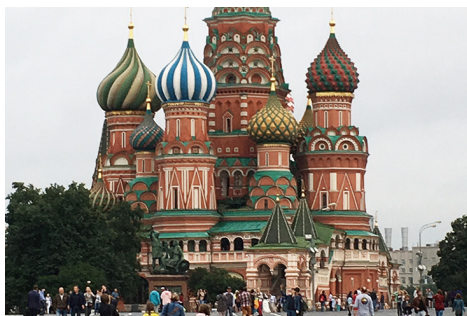
岡 ロシアは資源国であるが故に日本と異なり、住宅や都市での省エネ導入のモチベーションが働きにくいと聞いたことがあります。その中で、都市のコンパクト化やスマート化に繋がる TOD は、どのように受け入れられていったのでしょうか？

石川 ロシアの大都市は深刻な交通渋滞を抱えており、我が国にはその対策の一助となる TOD について多くの実績があります。我々がロシアでアピールするには、政策導入のモチベーションがそれほど高くない省エネより、実績のある「TOD」を機軸にした提案に絞ることが有効ではないかと思い、取組んできました。



左 | 石川上席研究員 右 | 岡研究員

私とロシアとの最初の関わりは、2012 年に開催されたモスクワ市拡張計画のコンペで、露英日 JV チームの一員として参加しました。日建グループは主として拡張エリア (約 1500 km²) のコンセプトプランの作成を担当し、拡張エリアを徹底



赤の広場に建つロシア正教会の聖ワシリイ大聖堂

的な TOD 型都市構造にすることを提案しました。

モスクワ市の中心部は深刻な交通渋滞を抱えていることから、拡張エリアについては最初から交通渋滞の抑制や、自然環境との共生というテーマを織り込み、公共交通を主体とする移動環境とコンパクトな市街地を実現するため、我が国のコンパクトシティ政策と鉄道沿線開発をトレースして提案しました。残念ながらコンペの最優秀案には採択されませんでしたが、この TOD コンセプトは、コンペを計画していたモスクワ市の都市政策研究所 (GENPLAN 研究所) の所長から高い評価を受け、その後モスクワ市政府をはじめとする都市政策関係者とのお付き合いが始まりました。

TOD そのものは新しい考え方ではありませんが、モスクワは欧州の都市の中でも特殊で、1,000 万人を超える巨大都市です。街並みは全くの「欧州」ですが、都市の規模や人口密度はど

主なプロジェクト

- 2012 年 モスクワ市拡張コンペーTOD 都市構造の提案
スマートシティフォーラム@在露日本大使館
- 2013 年 日露都市環境問題作業部会設立
- 2014 年 日露フラッグシッププロジェクトの特定
駅街本（ロシア語版）発刊
（モスクワアーバンフォーラムでプレス発表）
- 2016 年 ロシア版都市環境整備基準（案）作成支援
ヴォロネジ都市再生マスタープラン作成支援
住宅信用債権機構（AHML）との包括協定
- 2017 年 ウラジオストク都市圏戦略ビジョン提案

モスクワの夜景。中央の明るい場所がクレムリン

ちらかと言えばアジア的です。そのため、交通環境の改善や都市構造再編に関しては、アジア的ソリューションが役に立つと思われたのでしょうか、日本の都市政策がロシアの方々にとっては興味深い研究対象となり、積極的に自分たちの政策に取り入れようとされていることが実感できます。特にモスクワでは、旧貨物鉄道が旅客線化され、駅前の都市開発も同時開業するなど、2012～3年頃から、TOD 政策の推進に大きく舵を切ったように思います。

そうした中、日本と中国で出版していた駅街本

のロシア語版(※)を2014年に出版したのですが、モスクワ市の市長、主任建築家、GENPLAN 研究所所長に、その巻頭言を書いて頂きました。それも今思えば、彼らがモスクワ市の都市再生には TOD 導入が不可欠との認識をお持ちだったからだと思います。

したがって、ロシア側に TOD を受け入れる素地があったこと、我々も TOD を主軸に提案していたことが、たまたまタイミング良く重なって、運良く今ロシアの都市開発・都市政策に関わる機会につながっていると思います。



※ 駅街本

ロシア語版
「駅まち一体開発
～公共交通指向型まちづくりの
次なる展開～」

Kostrona Holdings 社
(2014年12月12日)





グレムリン北側にあるマナーージュ広場の芝生

岡 もう一つの日本の得意技である「省エネ」についてはいかがでしょうか？

石川 省エネについては、都市政策単独で普及・浸透させるのは難しいなあと感じます。ロシアの豊富なエネルギー資源は、国際競争力や外交面からも極めて有効なツールなのですが、国内で浪費してしまえば、自ら国力を弱めていることになります。したがって「都市・建築における省エネ」は、貴重な資源の国内での浪費を抑制する有効な政策ですから、エネルギー政策・外交戦略の観点からも重要な意味を持っています、という説明をすることが多いです。

現在ロシアのクラスノヤルスク市で、NSRI は APEC の LCMT (Low Carbon Model Town) プロジェクトを担当していますが、市長は、都市全体の省エネ・スマート化の推進に極めて強い意欲をお持ちだと聞いています。ここでの取組みが、今後のロシアにおける省エネ・スマート化の政策と都市開発の先導プロジェクトになり、ロシア全土にスマート化が普及することを期待しています。

ロシアの人々とお付き合い

岡 現地政府、ディベロッパー、建築家やコンサルタント等、様々なロシアの方々とお付き合いする中で、マナーやルールにおいて、日本との違いを感じることはありますか？

石川 国や地域によってルールやマナーは違って当たり前なので、常に「郷に入っては郷に従え」という気持ちでいます。なんとなく、街なかを歩きかう人々も不機嫌そうな面持ちで、とっつきにくそうな方が多くいるように見えますが、スーパーの店員さんなどは親切で、居心地も悪くありません。私の周りのロシア人の方々も親日で、日本人へのリスペクトを感じます。狭い交友範囲ではありますが、ロシア人の印象は、「ロジカルな思考を好み、少し理屈っぽいのが納得すれば行動は早い。しかめっ面だが、親切かつ感情豊かで情熱的」って感じでしょうか。理詰めで物事を組み立てることを好むという意味では、きっちりした性格の日本人にはお付き合いしやすいかもしれません。



帝政ロシア時代の1893年に完成したグム百貨店

日露都市環境作業部会について

石川 2012年の日露経済関係閣僚会合「貿易経済に関する日露政府間委員会」において、ロシアが抱える交通渋滞、インフラ老朽化、環境汚染などの都市環境問題をテーマとする政府間会合（日露都市環境作業部会）の設置が合意され、2013年に第1回総括会合が開催されました。以降、国土交通省からこの取組みの支援業務を継続受託し、日露両国が支援するモデル都市（ヴォロネジ、ウラジオストク）の都市再生コンセプトプラン等の作成支援に関わっています。

当該国の都市政策支援の一端に関わる機会を与えられたというのは、政府間会合支援の醍醐味であり、貴重な経験でした。昨年もロシア連邦政府から要請された都市環境整備基準の作成支援を行いました。ロシア側で制度化に向けた詳細検討がなされた後、日本の知見・ノウハウが具体的なルールとしてロシアで展開されると嬉しいですね。

今後も日露経済協力プランは継続し、TOD計画での日露協力も構想されています。近い将来、

ロシアで日本の技術を導入した都市開発・インフラ整備が実現し、「日本クオリティ」が都市課題の解決の一端を担う日が来ることを楽しみにしています。

石川 貴之 | いしかわ たかゆき
上席研究員

専門分野

複合施設等の企画立案
都市開発及び再開発計画の計画立案、事業推進支援
都市ビジョン及び地域活性化の計画立案
都市デザイン、景観計画及び景観誘導方策の立案

2004年から東アジアやロシアなど、海外での街づくりに関わるようになりました。出張時には必ず早起きして1～2時間ほどの街歩き。街並みや生活を直接五感で感じることを通じて、その国の素晴らしいと課題を体感しています。意外にこの散歩が日本の街の良さと悪さも同時に感じる良い機会になっています。

インタビュー

岡 万樹子 | おか まきこ
研究員



勉強会 グロープマネージャーが企画した社内勉強会をご紹介します

水とグローバルリスクと持続可能性

[講師] 東京大学総長特別参与・生産技術研究所 教授 沖 大幹氏

グローバルリスクと水問題の関係、それらへの取組みによる持続可能な開発への適応について、仮想水やウォーターフットプリントといった評価指標をもとにご講演いただきました。



「水の惑星」と言われる地球でなぜ水不足が生じるのか？水資源が季節的にも地理的にも偏しているからであり、圧倒的に単価の安い水資源を運ぶことが市場価値に合わないからです。一方、穀物や肉類の生産には多くの水が必要で、それらを輸入することは、水を輸入していることと同じことになります。



このような考え方を仮想水（ヴァーチャルウォーター、以下 VW）と呼んでいます。

世界の地域間の VW 貿易では、北米や豪州地域から輸出し、東アジアや中東地域などで輸入している関係となり、日本は輸入国となります。水資源は、経済的に豊かな国では水ストレスがあっても VW 貿易で水不足を解消できますが、貧しい国では VW 貿易ができないため水不足のままとなります。

ダボス会議で知られる世界経済フォーラムにおけるグローバルリスク報告書 2017 年度版では、洪水や暴風雨など水に関連する自然災害によるグローバルリスクの影響度や可能性が高いことが示されています。



また、2011 年のタイの大洪水が世界的な経済活動に波及したことに代表されるように、企業の水リスク管理に対する意識は高まっています。

水利用に関する潜在的環境影響を定量化するには、ウォーターフットプリントを利用することができます。こうした環境指標導入の動きは、世界的な広がりを見せつつあり、今後は企業による環境問題への積極的な取組みへの活用が期待されます。

国連では、2015 年に「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」が採択され、「持続可能な開発目標（SDGs）」として 17 の目標が示されました。その内、水関連の目標としては、「水と衛生」や「気候変動」が大きく関係します。今後は、SDGs への取組みが企業の存続に影響し、それらへの取組みの潮流自体が新たな需要をもたらすことになると考えられます。



エネルギーマネジメントグループ
高橋 直樹 | たかはし なおき
上席研究員



今後は、今回の水資源に関する知見を踏まえ、NSRI の得意とするエネルギー分野における調査研究成果と融合して、あらたなエネルギーと水の評価ツールの開発などに役立てていきたいと考えます。

旅する研究員 所員が出張で訪れたまちをご紹介します

祝祭のまちキャンディ

JICA 業務でスリランカ第2の都市キャンディの都市計画マスタープラン策定業務に携わっています。1回の現地渡航が1か月近くになることもあり、帰国したら季節が変わっていたということも。今回は、祝祭と都市空間の関係性をみてきました。



ベラヘラに出勤する象



お寺の謎の生物



象の駐車スペース

キャンディ（英語：Kandy、スリランカ中部州の州都で人口約12万人）は仏歯寺という仏教寺院を中心に発展した街で、1988年に世界遺産に指定されています。8月に同地で実施される、スリランカ最大の仏教のお祭の「ベラヘラ祭り」が有名です。



仏歯寺のお供え物

まちなかは約15mの幅員のグリッド状の道路が走っていて、仏歯寺から出てきた象・楽隊・踊り子がこの通りを3～5時間にわたって練り歩きます。



ベラヘラ路上の象

建物の高さが2、3階程度と低い割に道路幅員が広いと思っていたのですが、この祭を見ることによって、この通りは象3頭が横並びで歩いても十分に通れる幅として作られていることがわかります。沿道の建物にはバルコニー等があり、お祭の観覧席としても機能しており、キャンディのまちの古い地区が祝祭の装置として機能している様子がわかります。

祭りの期間中、のべ100頭以上の象を見たのではないのでしょうか。一生分の象を見た、そんな気分です。



諸隈 紅花 | もろくま べにか 研究員

専門は歴史的環境保全（計画系）。最近はニューヨークのウォーターフロントの工業地帯（おしゃれになってない方）に興味があり、普通の観光客が行かないような場末感たどようマニアックな場所に行くことが多いです。

今号で登場した都市



編集後記 >

今号より新しく生まれ変わりました！



2006年4月に創刊したニューズレター VIEW は、本号(117号)から装いを新たにしました。今後は、WEB配信と冊子の両方でお届けします。

設立10周年を記念してタブロイド紙P104(びーいちまるよん)を5号発行し、紙媒体ならではの魅力を再認識したことが、ニューズレター VIEWを見直すきっかけとなりました。

今後は季刊(1月、4月、7月、10月)となり、内容を充実させ“よりわかりやすい情報発信”を目指します。

担当：日建設計総合研究所 VIEW 編集部
お問合せ：webmaster_ri@nikken.jp